
配達人

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

配達人

【Nコード】

N6151G

【作者名】

Litaly

【あらすじ】

今日も僕は、朝4時のニュータウンを走る。山ほど新聞を載せた自転車です。

中学2年の頃、僕は初めて女の子に恋をした。

初恋は実らない、なんて人は言う。

僕の恋ももちろん実らなかった。

そのちょっとした失恋は当時の僕にとって世界の終わりのように思えた。

僕の申し出を断る為の言葉を、電話の向こうの少女が必死で考えてる。

そんな数十秒の沈黙。

その後、受話器にきつく押し付けられた僕の耳が辛うじて拾える程度の小さな声。

ごめんなさい。

嫌いじゃないよ。

でも、ごめんなさい。

ニュータウンの夜はとても静かで、とても長くて、僕は眠る事も出来なくて、明日が来る事も憂鬱で、ベッドの上に仰向けで寝転がり、今日と明日の隙間にだけ存在する不思議な闇をただぼんやり眺めてた。

その不思議な闇には奇妙な説得力があって、僕はその闇から二度と出る事が出来ないんじゃないかなんて、そんな風な事を考えた。

築14年、僕と同じ年の集合団地の階段を駆け上がる音。

そしてドアの郵便受けに何かが捻じ込まれる。

ガコン。

足音はまた遠ざかっていく。

僕は窓を少しだけ開けて、外を見る。

新聞配達のおじさんが、丁度今僕の団地の階段の最下段を駆け降り、バイクに跨る。

そして、次の団地へと、走り去っていく。

おじさんが走るその道の先に、朝の陽を僕は確かに見つけた。

どんな夜にも朝は確かにやって来るのだという事を、僕は14年生きて、その日初めて知った。

14年も生きて、それまでそれを知らなかった。

僕は今、新聞配達員をしている。

人々が朝の一番に手にするそれを、僕は今日もこれから届けに行く。

眠れずに朝を待つ少年に、朝は確かにやってくるのだと伝えるために、僕は今日も朝4時のニュータウンを自転車で走る。

僕が毎朝届けているのは、文字を刻んだ紙の束だ。

でもそれによって人々に伝えられるものは、きっとそこに記された文字列が語る出来事だけじゃない。

朝が来るといふ事。

朝の情景。

朝焼けだとか。

次へ向かって走る、その足音だとか。

あるいは、涙の乾いた跡だとか。

そんな、情景。

僕はそんな情景の中を、今日も山ほど新聞を載せた自転車で駆け抜ける。

大丈夫。

だいじょうぶ。

今日がどんな日であっても、ちゃんと明日はやってくるから。

僕は毎朝、ちゃんとそれを届けに行くから。

もうすぐ4時になる。

そろそろ行つて来る。

それじゃ、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151g/>

配達人

2011年1月20日02時16分発行